

本稿は、8月28・29日に行われた自治労連第44回定期大会での代議員発言について、加筆・修正したものです。

「青プロ」中国ブロック 道のり全てが、私たち青年に与えられた学びの場

広島自治労連

議案に賛成の立場から、私が約3年に渡り実行委員を務めてきた、“自治労連30周年青年企画・青年未来づくりプロジェクト—通称・青プロ”について、中国ブロックでの取り組みを報告させていただきます。

『青プロ』は全国を7ブロックに分け、ブロックごとに集まった青年実行委員が一から企画をつくり、実際に行うというプロジェクトです。私は中国ブロックの青プロ実行委員の一人として、その活動に携わってきました。本来であれば2020年6月に、広島県呉市で2日間にわたり行われるはずだった中国ブロックの青プロは、新型コロナウイルスの影響を受け、2020年3月、開催を目前にやむなく中止となってしまいました。

そんな『青プロ』が中国ブロックで再始動することとなったのは、青プロが本来開催されるはずだった日から、まる一年後の2021年6月のことでした。リアルで会ったこともない、新しい実行委員のメンバーと企画することとなった『新・青プロ』。そこで私たちがテーマと定めたのは『福祉』でした。広島県福山市・鞆の浦、そしてそこで重要な役割を担っている福祉施設『さくらホーム』——そこで行われている地域共生社会への取り組みが、

青プロのテーマである「民主的自治体労働者論」と通ずるところがあると考えたからです。

そんな待ちに待った青プロのプレ企画は、2022年5月29日、各県会場や自宅をZoomで繋ぐというリアル・Zoom併用の形式で行われました。そこでは、実行委員が作った「老後すごろく」で参加者同士の交流を図ったり、「自分たちの住みやすい街は何か？」を考えるグルーptークを行ったり、青プロ本番に向けて作った宣伝用の動画を流したり…そういった笑いあり、学びありの充実した会を52名の参加者と迎えることができました。

そんなプレ企画を終えてから青プロ本番までの一ヶ月もない期間は、プレ企画の反省を活かしつつ、本番の内容を固め、同時に宣伝活動にも力を入れなければならないという怒涛の日々でした。そんな苦しい期間を乗り越えた6月26日、青プロ本番を迎えた私たちを待っていたのは、プレ企画をはるかに超える69名の参加者でした。本番では、岡山県高梁市職労の岡崎加奈子さんの「民主的自治体労働者論」の講演を始め、「地域共生社会」をテーマに鞆の浦での取材やインタビューの様子をまとめた動画視聴、「ラウンジ」というオンラインツールを使ったクイズ、「いい仕事と

は何か」を考えるグループトーク、参加者全員で行う手話歌などが行われました。プレ企画での反省を活かしたことで、実行委員それぞれが確かな役割や見せ場を持ち、いい所を最大限に発揮することができる素晴らしい会となって、私たちの青プロは幕を閉じました。

ここまでが、中国ブロックの青プロのあらましです。

私が今日の発言を考えるにあたって、一番苦労したことは、青プロに向き合った3年という時間を、その何万分の一とも言えるほんの数分の発言時間にどうまとめればよいかということです。

実行委員みんなで大切に作り上げてきた青プロの良さや、本番当日に至るまでの様々な思いは、たった数分で到底伝えることができるものではありません。幸い、中国ブロックの青プロは、プレ企画も本番も動画として残されており、内容について詳しく知りたければ、いつでも見返すことができるので、それを見てもらった方が何よりもわかりやすいと思います。

また、私が今日ここで語ることのできなかったことについては、青プロと一緒に取り組んできた他の実行委員メンバーに聞いてもらえれば、それぞれがそれぞれの見方でいくらでも魅力を語ってくれると思います。こんな勝手に言うと他のメンバーから怒られるかもしれませんが、この青プロを経て、自然とそう言ってしまうぐらいに、私は一緒に過ごしてきた実行委員たちのことを信頼することができるようになったのだと思います。

さて、私たちの青プロは成功したと言われているますが、もし仮に、どこかのブロックがそっくりそのまま、まったく同じ内容の企画を行ったとしても、きっと同じような結果に

はならないと思います。私たちの青プロの成功は、そこに集まった個人のアイデアや才能を、ふんだんに活かした企画を行ったことにこそあると感じるからです。それは青プロのフィナーレを飾った手話歌の『ナンバーワンにならなくてもいい もともと特別なナンバーワン』というフレーズに、まさに表われていると思います。

中国ブロックは、決して恵まれた環境だったわけではありません。中国5県のうち、3県は県単位の青年部がなかったり、あっても休止状態であったりと、なんとも寂しい状況でした。そんな中、私たちの実行委員会はZoomを使って2週に一度、仕事終わりで疲れているはずの平日夜1時間半を使って、1年の間に約30回も行われました。それは、実行委員一人ひとりが、それぞれに仕事や家庭、様々なものを抱えながら、それでもひとつの目標に向かって一緒に進んできた、そういう日々の積み重ねであったと思います。そしてそれと同時に、疲れた日でも実行委員会に顔を出せば、いつもと変わらないメンバーが待っていてくれ、誰かが自然と心をほぐして笑顔にさせてくれるような、そういうとても大切な場でもあったと思います。

青プロは、そこに至るまでの道のり全てが、私たち青年に与えられた学びの場でした。そんな貴重な学びの機会が、役員かどうかを問わず、幅広く、これからも青年たちを信じて与え続けてもらえるのであれば、それは非常に有難いことだと思います。

私は、今や青年部の役員でもなければ、青プロの実行委員でもない、ただの一組合員です。明日からもまた昨日までと同じように仕事を続ける中で、辛くなったり苦しくなったりして、立ち止まることもあると思います。

けれど青プロを経た今の自分なら、たとえ遠く離れていても、同じように「誰かのため、自分のためにいい仕事がしたい」と一生懸命働いている仲間がいることを感じ、また前を向いて走っていけるような気がします。

明日へ向かうパワーをくれる、そんなステキな青プロと一緒に作り上げてくれた実行委員、また、無理だと思っていたその夢の実現を傍で支えてくれた多くの方たちに、今ここで改めて感謝の気持ちを述べて、私の報告を終えたいと思います。